

# 統合医療で がんに克つ



## 特集 がん治療と機能性食品

### 注目される植物性天然抗がん成分「サルベストロール」

柳澤厚生 国際オーソモレキュラー医学会会長 スピッククリニック名誉院長

### リポ・カプセルビタミンCとがん治療

—リポソーム型ビタミンCの効果

松村浩道 スピッククリニック院長

### 抗がん剤治療や放射線治療の副作用を軽減できるだけでも、 サプリメントを用いるに足る理由になる

北廣美 医療法人やわらぎ会 やわらぎクリニック 院長

### ロングセラー健康食品 環状重合乳酸(CPL) 使用体験 アンケートから見えること

取材協力／ユウコーエンタープライズ

取材・文／高山健二 医療ジャーナリスト

#### 特別インタビュー

#### シリーズ

## 医療の現場から スピッククリニック 松村浩道院長に訊く

患者さん一人一人にしっかりと寄り添う、患者さん中心の医療が大切だと考えています  
—エビデンス・ベースド・メディシンとナラティブ・ベースド・メディシンは、互いに補完しあう関係です  
重視する点としては、がん細胞とがん幹細胞の両方をにらんだ治療を行なっています

特集

ロングセラー 健康食品  
乳酸(CPL) 使用体験アンケート  
トから見えること

取材・文●高山健二 医療ジャーナリスト

あまたある“がんを縮小させる製品”的ななかで根強く売れ続ける理由

がんに対する健康食品・機能性食品には、流行りすたりがあるようです。アガリクス、プロポリス、靈芝、メシマコブなどの知名度は高く、使われた方も多いかと思い

そんな発想的なヒントこそしないもののロングセラー的な売れ方をしている食品があります。よい例が「環状重合乳酸」です。標題にある英語3文字の略式名称のほうが通りはよいかもしれません。

発売は1990年代後半、それから10年間で約25万箱が市場に回りました。その後も順調に出荷

この食品は、なぜゼロングセラーとなつてゐるのでしょうか？

他の健康食品・機能性食品とは一線を画す特徴があり、それが理由となつてゐると思われます。

多くは説由来が曖昧で、どこで  
どのように生まれたのかよくわか  
りません。中国の山岳地帯で昔か  
ら使われていた、地中海沿岸で使  
われていた、といったように長寿  
国（地域）をルーツとして紹介さ  
れるものが典型です。またどんな  
成分が機能を發揮するのか（しそ  
うなのか）もあやふやです。たと

を大量に含有している、と言つ  
も、ポリフェノールには膨大な  
類があり、そのどれであるのか  
わかつていない、突き止められ  
いないことが大半です。

質であれば、いくらがんを縮小させることもできます。それを使って助かる人は一握りに限られてしまします。したがつて人工的に合成できるということは重要なことなのです。

され、かんを抑制する具体的物質の同定に成功。その化学的組成の形状から、この名がつきました。90年代に入り、この物質を人工的につくる合成に成功。これにより製品化にメドがつきました。仮に

その2 かんに対する有用性を確かめた科学的研究や示唆する研究が豊富に存在し報告されている  
**(図1 「CP」実績)**

実績 (2009年2月現在)

#### ► CPL in vivo 使用例（研究症例数）

- ・動物実験例 : 402例 (安全性試験)
  - ・動物飲用症例 : 18例 (犬・猫・ハムスター・インコ)
  - ・ヒト飲用症例 : 142例 (評価参加施設: 17施設)
  - ・CPL導入医療機関 : 50施設 (うち大学病院およびその附属施設)

\*提携機関提供データの集積結果

- ・CPL原料 : 6,000万g
- ・製品仕様 : 250,000箱 (2,000mg×120包入への換算データ)

※CPL製造メーカー調べ

义 1

▶ 學術會議·論文·書籍

四

たとえば新薬が承認されるまでには、通常はまず健康な人を対象に毒性試験（どれくらいの投与量で、どんな毒性）

療を受けたり、健康食品を選んだりする際にも、よい指標となるので、もう少しうまく説明します。

療シャーリリストが第  
や研究者に取材に行く  
びにこの言葉を聞いた  
「これはエビデンス(証  
とつた治療法だよ」と  
です。「証拠のある医  
療」を英訳するとエビ

場では、医師が得意だ  
療をやる、その方法一  
からそれをやる、といつ  
く、試験や研究によつ  
て確認された治療法を行  
う潮流が押し寄せ、ま  
上界を席巻したのです。

者が対象に不満に意見があるなどうかを試し、そのうえで従来の標準薬との比較試験をして、狙った効果において優るか同等であれば承認に至ります。この試験の対象となる人は少なくとも数百名（珍しい疾患であれば数十人）規模であるのが普通です。

これは代表例ですが、こうして効果や副作用の出方を調べたものがエビデンスにのつとつた薬、治療ということになります。医師の経験則や得意不得意だけに頼った治療法とは違います。もちろん医師の経験則はとても重要なのですが、その前に証拠にのつとつた治療が存在するのならそちらを優先的に行うのが当たり前になっています。

**図2**をご覧いただければ、環状重合乳酸ではたくさんの基礎研究や臨床研究が行われていることがわかります。

その3 医療施設でどれほど導入されたか、また用いた症例について追跡調査と評価が行われている健康食品・機能性食品の評価は、ユーザーの声や個人の医師の推薦という形で紹介されることがほと

## 環状重合

その3 医療施設でどれほど導入されたか、また用いた症例について追跡調査と評価が行われている健康食品・機能性食品の評価は、ユーザーの声や個人の医師の推薦という形で紹介されることがほとん

図2をご覧いただければ、環状重合乳酸ではたくさんの基礎研究や臨床研究が行われていることがわかります。

療ジャーナリストが第  
や研究者に取材に行く  
びにこの言葉を聞いた  
「これはエビデンス（証  
とつた治療法だよ）」と  
です。「証拠のある医  
療」を英訳するとエ  
ビデンス・ベースド・  
メディスン＝EBM  
となります。この考  
え方については、医  
これは代表例ですが、こうして  
効果や副作用の出方を調べたもの  
がエビデンスにのつとつた薬、治  
療ということになります。医師の  
経験則や得意不得意だけに頼った  
治療法とは違います。もちろん医  
師の経験則はとても重要なのです  
が、その前に証拠にのつとつた治  
療が存在するのならそちらを優先  
的に行うのが当たり前になつてい  
ます。

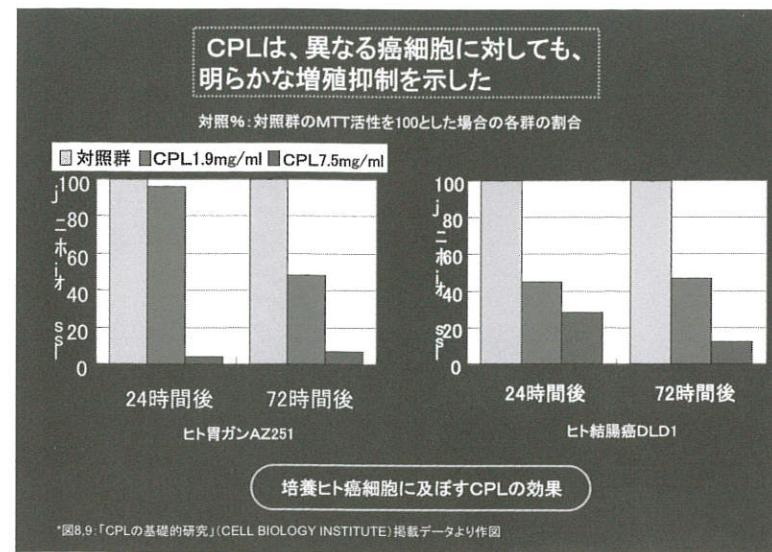


図6 培養ヒトがん細胞に及ぼす CPL の効果

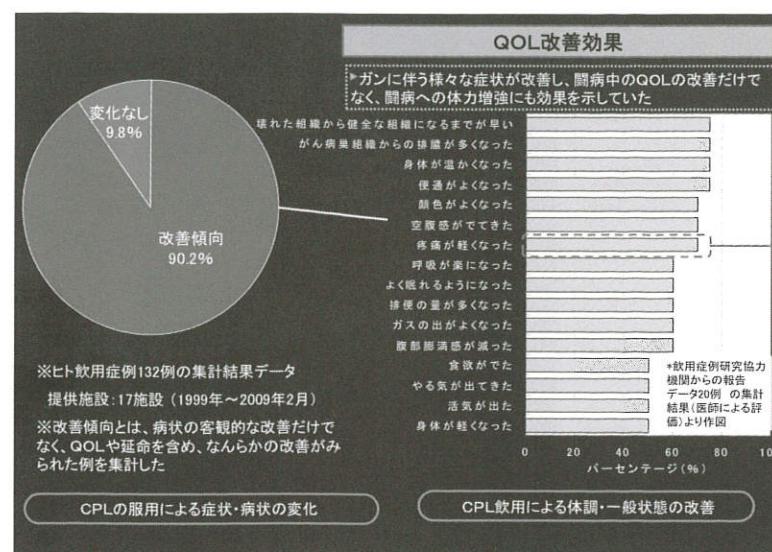


図7 CPLの服用による症状・病状の変化ならびに、CPL飲用による体調・一般状態の改善

対する健康食品・機能性食品に求められる役割は、以前と少し違つてきてはいるのではないでしようか。

以前は何よりがんの縮小率に期待して、そのような報告がよくなされてきました。しかしいずれもごくまれなケースを抽出して紹介している、あるいは抗がん剤や放射線治療の効果と分別できかねるものがほとんどでした。3大療法が無効になつた患者さんの利用があつ多かつたのも、そんな背景があつ

なんですが、そこに恣意的な意図が紛れ込むことが多く、信憑性・信頼性の点で疑問符がつくものが目立ちます。多くの医療機関が採用・導入して、実際に患者さんに対し使っているのであれば、医師はその使用感について、患者さんに訊ねたり、検査で調べたりすることができます。数例について医学的・科学的に調査を行えば、症例報告として発表できます。一定のまとまった数になると、症例報告より証拠能力の高い研究としてまとめて、学会などで発表することも可能になります。

したがって医療機関の導入例、

研究例が存在することは、健康食品・機能性食品において、客観的な信頼における評価につながります。その結果、好ましい成績が出来ているようであれば、私たちユーザーにそのことを訴求することが可能になり、私たちの選択基準のよい指標となります。

以上、3つの理由、ポイントを、ユーザーが評価して、環状重合乳酸はロングセラーになっているものと思われます。

手術、放射線、抗がん剤の順にリレー式に実施していくのが普通でした。現在はこの3つを組み合わせることで主流となっています。手術の後、あるいは前に抗がん剤、手術後に放射線、手術不能例での放射線と抗がん剤の組み合わせもよくあります。

そして2000年代に入つて次世代の抗がん剤とでも言うべき分子標的薬の開発が相次いで、多くのがん医療の標準療法になくてはならないものとなっています。がんの増殖に深く関わっている遺伝子やタンパク質が相次いで発見され、これを標的にして、がんの増殖を阻むのです。副作用が少ない

す。したがつてその事前検査ができる薬剤については、無駄な副作用に苦しむことはありません。

アメリカでは、新規の抗がん剤の承認において、すでにこの分子標的薬がとっくに過半数を超えるようになっています。日本でも手術や放射線治療と組み合わせたりすることが急速に進んでいます。

この分子標的薬は吐き気や抜け毛、倦怠感などの副作用はほとんどないのですが、薬剤によつては皮膚障害など特有の副作用があります。

いざれにしろ3大療法の併用療法などによつて、がんの縮小率や延命期間は改善されてきていま

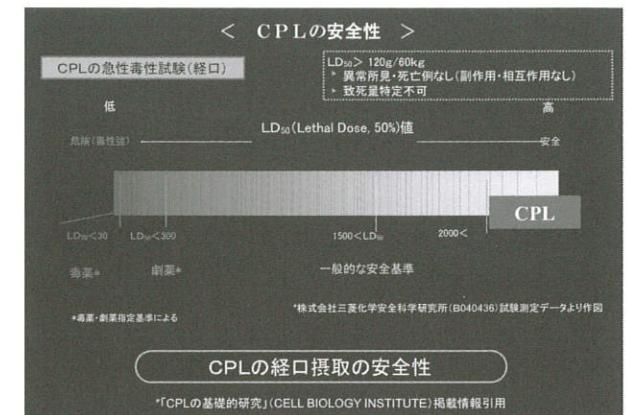


図3 CPIの経口摂取の安全性

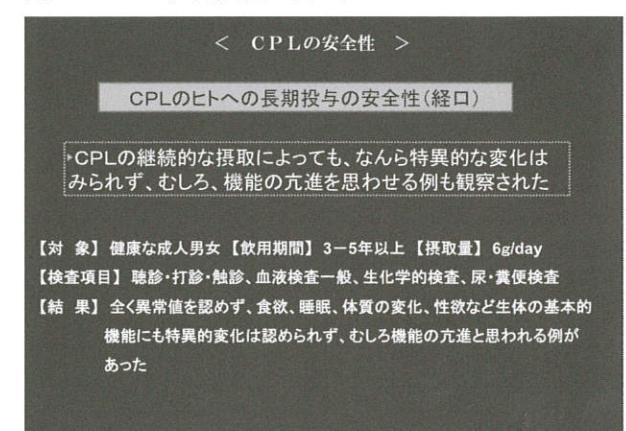


図4 CPLのヒトへの長期投与の安全性（経口）

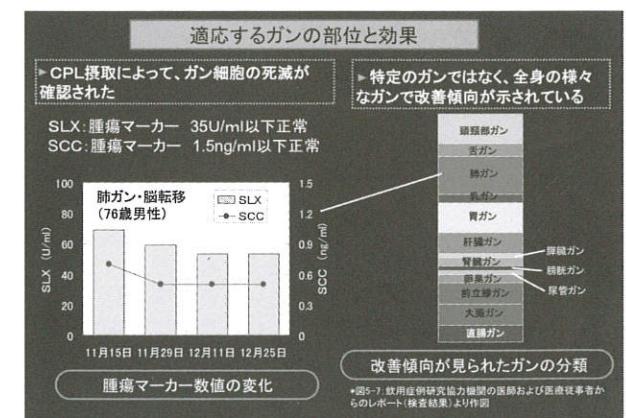


図5 適応するがんの部位と効果

の患者さんを対象とした調査と学会報告があり、その結果については図7「QOL改善効果」をご覧いただければ、どんな症状か、がん種（部位別がん）それぞれではどうか、といった詳細がわかります。ユーザー調査と結果についてほぼ符合します。

がんにかかる人は年間100万人に達しようかとしていますが、治療前の生活に戻れる人、がん治療をしながら働きに出る人が、今後急増するはずです。その人たちにとつてQOLの維持・改善は、きわめて重要なテーマとなります。環状重合乳酸はそれを支える心強い存在になるのではないでしょうか。

用モニタリング調査が行われました。直筆の手紙や医療機関の検査票が添付されているものもあり、胸に迫る内容です。計34名から回答があつたのですが、「飲用目的」の欄で10名ががん患者さんとなっています。「飲用後の違い」では、治療後の体力回復、がんに伴う症状改善などをあげています。QOLの改善につながっていると見ることができます（図3～図6）。

す。したがつてその事前検査ができる薬剤については、無駄な副作用に苦しむことはありません。

アメリカでは、新規の抗がん剤の承認において、すでにこの分子標的薬がとつくに過半数を超えるようになっています。日本でも手術や放射線治療と組み合わせたりすることが急速に進んでいます。

この分子標的薬は吐き気や抜け毛、倦怠感などの副作用はほとんどないのですが、薬剤によっては皮膚障害など特有の副作用があります。

いずれにしろ3大療法の併用療法などによつて、がんの縮小率や延命期間は改善されてきていま

ことと、がんを治癒させることはないものの、抗がん剤と違つて効果的であれば数年単位で継続して使用できることから、がんとの共存を可能にする薬剤といつてもよいかもしません。薬剤によつては